

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720191

研究課題名（和文）「卜筮祭祷簡」による戦国楚の宗教文化の研究

研究課題名（英文） Research of the Chu religious culture in the Warring-States period based on the Divination/Sacrifice Manuscripts

研究代表者

森 和 (MORI MASASHI)

早稲田大学・高等研究所・研究員

研究者番号：10367146

研究成果の概要（和文）：200 字程度

「卜筮祭祷簡」の分析によれば、封君や大夫など戦国楚の貴族層の求めに応じて占トを行っていた貞人には官名が付される者と姓名のみ記される者の 2 種類あり、貴族層との関係も一様ではない。また「卜筮祭祷簡」において「巫」字は祭祀対象としてのみ用いられており、実際に占トや祭祀に従事する宗教的職能者とは用字の上で明確に区別されていた。これは戦国楚の宗教文化を担っていた巫祝集団の多様性とある種の分業体制の可能性を示唆している。

研究成果の概要（英文）：

According to analysis of the Divination / Sacrifice Manuscripts, there are two kinds of fortuneteller; who accompanied by the name of an occupation and who describe only a full name, the relation between these fortunetellers and the aristocracy differ, too. "Wu(巫)" is used only as a religious service object in the Divination / Sacrifice Manuscripts. It was clearly distinguished from the religious person actually engaged in fortuneteller or religious service on the way to use characters. This is suggested the diversity of the religious person group who was bearing the religious culture of the Chu, and the possibility of a kind of division of work.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：中国古代史

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：出土文字資料

## 1. 研究開始当初の背景

本研究が分析対象とする「卜筮祭祷簡」は、主に中国湖北省江陵地区で発見される戦国時代の楚墓に副葬される竹簡資料である。この種類の竹簡は現在までに望山 1 号楚墓、天星観 1 号楚墓、秦家嘴 1・13・99 号楚墓、包

山 2 号楚墓・葛陵 1 号楚墓からそれぞれ計 7 件出土している。しかし竹簡の残存状態や公表の遅れなどの諸条件により、「卜筮祭祷簡」研究というのは最も完全な資料である包山楚簡「卜筮祭祷簡」に基づいて行われ、中国では彭浩・陳偉・李零など諸氏が一定の成果

を挙げているものの、日本では僅か工藤元男・池澤優両氏に幾らかの専論があるだけである。また、この包山楚簡から復元された占卜・祭祀の体系には、その後に発見された「卜筮祭祷簡」と合致しない点があることが現在判明している。すなわち 1994 年に河南省新蔡県の葛陵 1 号楚墓から出土した葛陵楚簡「卜筮祭祷簡」には従来見られなかった要素が複数確認されたのである（河南省文物考古研究所編著『新蔡葛陵楚墓』大象出版社、2003 年）。本研究は、この葛陵楚簡の出土によって「卜筮祭祷簡」研究は個々の竹簡群を単位とする個別的研究から、それらの時期や楚国内の地域差を考慮して比較分析し、戦国楚の巫祝と貴族層との関わりを総合的に研究する資料的環境が整ったことを背景にして開始したものである。

## 2. 研究の目的

本研究は中国の長江中流域を中心とする楚の故地で発見される戦国時代の墓葬に副葬された竹簡資料「卜筮祭祷簡」を主たる史料として分析し、黄河流域のいわゆる中原文化とは異なり、「巫鬼を信じ、淫祀を重んず」（『漢書』卷 28 地理志下）と表現されながら、断片的な伝世文献の記述以外にはほとんど史料がなく、具体的な実態が知られていなかった戦国楚の宗教文化を“巫祝と社会との関わり”という視点から読み解き、その一側面を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 新しいデータに基づく訳注の作成

本研究では楚系文字で書かれた「卜筮祭祷簡」の解説・分析が中心となり、それは原則的に中国で刊行される発掘報告書およびそこに収録される図版・釈文・注釈に依拠して行われる。しかし不明瞭な図版も多いため、竹簡の所蔵機関との共同研究体制を確立し、赤外線カメラによる撮影を実施し、その最新最良のデータによる解説、新たな釈文・注釈の作成、内容の分析という方法を計画した。しかし赤外線撮影を行うための機材購入について関係諸機関との交渉・調整に膨大な而時間を費やした上に、かつ結果的に日本では購入自体が不可能となり、本研究の重要なポイントであった葛陵楚簡「卜筮祭祷簡」の赤外線撮影、それに基づく研究分析という計画を大幅に変更せざるを得なかった。

### ① 包山楚簡・望山楚簡

「卜筮祭祷簡」研究の基準となるのは、すでに「1. 研究開始当初の背景」で述べたように竹簡の状態が良く、最も体例が整っている包山楚簡である。そこで発掘報告書『包山楚墓』（荆沙鐵路考古隊、文物出版社、1991 年）所載の釈文注釈・図版を基に『包山楚簡初探』（陳偉、武漢大学出版社、1996 年）・『包山楚簡解詁』（劉信芳、芸文印書館、2003 年）などの専著および関連論文の先行研究の成

果を織り込む形で訳注作成を行った。その後、本研究課題以前に参加活動していた研究プロジェクトでの赤外線カメラで撮影された新しい写真に基づく新たな釈文・注釈が『楚地出土戦国簡冊 [14 種]』（陳偉等著、経済科学出版社、2009 年 9 月。2010 年 12 月第二版）として刊行されたため、(2) の報告書に基づいていた包山楚簡の訳注を最新の当該書により修正補完した。また望山楚簡についてもこの新テキストに基づく訳注作成を行った。

### ② 葛陵楚簡

葛陵楚簡については前掲報告書『新蔡葛陵楚墓』所載の図版・釈文と『楚地出土戦国簡冊 [14 種]』所載の釈文・注釈を対照し、邴尚白『葛陵楚簡研究』（台大出版中心、2009 年 12 月）などの諸説を組み込む形で訳注作成を行った。

### ③ 未公表の天星觀楚簡・秦家嘴楚簡

天星觀楚簡および秦家嘴楚簡の「卜筮祭祷簡」については釈文・図版ともに未公表であるため、簡文の復元を試みた晏昌貴「天星觀卜筮祭祷簡釈文輯校」・「秦家嘴卜筮祭祷簡釈文輯校」（ともに『簡帛数学与歴史地理論集』所収、商務印書館、2010 年 8 月）に基づき、テキスト化を進めた。

### (2) 各「卜筮祭祷簡」に対する構文分析

上記 5 種類の「卜筮祭祷簡」のうち保存状態が良く、体例が最も整っている包山楚簡の構文を基礎に逐字対照表を作成し、構文分析を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 葛陵楚簡「卜筮祭祷簡」固有の特徴

#### ① 貞人の属性

葛陵楚簡以外の「卜筮祭祷簡」（包山・望山・天星觀・秦家嘴）に見える貞人はほとんど全てが姓名のみ記されるが（天星觀に 1 例だけ「邴沈尹過」という地名＋官名＋名で表記される例がある）、葛陵楚簡の場合、「陵尹」のように楚王のもとで卜筮や祭祀を管掌する中央官（上海博物館蔵戦国楚竹書「東大王泊旱」）と思われるものや、「東陵亀尹丹」「葉小司馬陳無衍」のように封地内外の県名と官名が付された貞人が登場する。これが楚における封君の権力や勢力の大きさを意味するものであるのか、あるいは卜筮祭祷という営為の本来の性質（王権との関係やその公私の別など）に因るものであるのかは、更なる検討を必要とする

#### ② 祭祀における音楽の位置づけ

葛陵楚簡で提案される祭祀案は他に比べて種類や内容が豊富であるが、中でも神霊に音楽を演奏し捧げる儀礼が「(延鍾) 樂」「百」「贛」など頻見する。音楽を用いる祭祀は現在のところ、他では葛陵と同じ封君の墓葬に副葬されていた天星觀に見られるだけであり、貞人たちが卜筮を行って提案してい

た祭祀儀礼はその対象、すなわちクライアントの身分によって一定の区別があった可能性が考えられる。

## (2) 宗教的職能者「巫」の諸相

伝世文献において宗教的職能者は「巫」「巫祝」「巫覡」などと総称され、その性質は時代や資料により多種多様で漠然としている。しかし宗教的職能者の行為に密接に関連する戦国から秦漢代の簡牘資料において「巫」と表記される者たちについては以下のように3種に大別することができる。第一は秦祭祀対象としての「巫」で、これは戦国楚の「卜筮祭祷簡」と秦漢代の「日書」に収録されている占トの両方に確認できる。第二に身分や職掌の総称としてのみ見え、従事する具体的な宗教的活動は明らかでない「巫」。これは「日書」に見える。第三にクライアントの求めに応じて祭祀儀礼を実際に執り行う生身の「巫」。これは後漢中期の「序寧簡」に見える。

「卜筮祭祷簡」において実際に占トを行ったり、祭祀を提案する宗教的職能者はみな姓名を以て表記され(時には官名・職位も伴う)、「巫」とは記されないことから、戦国楚における各種の宗教的職能者はその従事する内容から一種の分業体制のような比較的厳格に区別されていた可能性が考えられる。また「日書」に見られる身分や職掌の総称として「巫」は時に否定的イメージを帯びて語られており、これは結果的に巫者を賤視していた漢代の人々に繋がる流れであると判断できる。その一方で「序寧簡」は実際の宗教的活動において「巫」が依然として必要であったことを示している。

このような「巫」の諸相と各簡牘資料の性質の関係は、占トと祭祀という「巫」の2種類の宗教的技能という観点から以下のように解釈することができる。本来、占トと祭祀はともに巫者集団の専門知識と経験に淵源するものであり、「卜筮祭祷簡」で言うならば、一般の士はおろか高位強権の封君・大夫であっても直接行うことは不可能であった。しかしこのような状況は「日書」に収録されるような各種の占トが流行し、「日書」の類がそのマニュアルとして流布するようになって大きく変化した。なぜなら「日書」があれば、専門知識のない人でも時日の吉凶やその対処法を判断できるためであり、巫者の側から言えば、その知識と経験によって独占してきた占トの一部が共有され、優位性が失われたことになる。しかし「日書」で判断できるのは病気の原因や降祟主体だけであり、巫者の役割の全てが「日書」のようなマニュアルに取って代わられた訳ではないため、「序寧簡」に見られるように、祟禍の解除や祈祷など実際に行う際には社会はまだなお巫者の有する宗教的な専門知識や技能を必要と

したのである。

## (3) 「卜筮祭祷簡」と「日書」の関係

現在の出土状況を見る限り、戦国楚の宗教文化の一端を具体的に示す「卜筮祭祷簡」は秦による中国統一以降見られなくなる。秦漢時代の墓葬からは入れ替わるように占トのマニュアルである「日書」が出土するようになるが、その宗教文化における立ち位置は大きく異なる。楚の滅亡とともに卜筮祭祷という習俗が消滅したとしても、それを構成する個々の祭祀方法や対象などの諸要素は宗教的職能者によって継承されたはずである。例えば、葛陵楚簡「卜筮祭祷簡」にのみ見られた「告」は九店楚簡「日書」告武夷篇や睡虎地秦簡「日書」甲種・馬祿篇など特定の神霊に対する祝告と基本的に同じ宗教的行為であると考えられる。しかし(2)で述べたような簡牘資料としての本質的相違があるためか、「日書」に収録されている幾つかの占トについて検討した結果からは同様の要素であることは確認できても、両者の間に確実な継承関係を見出すことは困難であった。この点については「卜筮祭祷簡」後の展開として、戦国楚の宗教文化が秦漢代に消滅したのか、あるいは何らかの変化を経て後の社会に受容されていったのか、複数の資料が出土している「日書」の更なる比較検討が必要である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- (1) 森和「簡牘資料中所見「巫」的諸種形象——以卜筮祭祷簡和《日書》為主的考察」(馮天瑜主編『人文論叢』2010年卷、中国社会科学出版社、2011年11月、298~316頁)、査読有。
- (2) 森和「離日と反支日からみる「日書」の継承関係」(工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』雄山閣、2009年3月、132~156頁)、査読無。
- (3) 森和「「日書」と中国古代史研究—時称と時制の問題を例に—」(『史滴』第30号、2008年12月、25~44頁)、査読無。
- (4) 森和「日者の語った天地の終始」(『アジア遊学』第115号、勉誠出版、2008年10月、126~135頁)、査読無。
- (5) 森和「從離日與反支日看《日書》的繼承關係」(簡帛網、武漢大学簡帛研究中心、2008年8月、[http://www.bsm.org.cn/show\\_article.php?id=867](http://www.bsm.org.cn/show_article.php?id=867))、査読有。

〔学会発表〕（計 3 件）

- (1) 森和「岳麓秦簡「占夢書」初探」（日本秦漢史学会第 23 回大会報告、於財団法人東洋文庫、2011 年 11 月 5 日）
- (2) 森和「放馬灘秦簡乙種《日書》所見音律占淺析」（中国簡帛学国際論壇 2010、於中国・湖北省武漢大学、2010 年 12 月 6 日）
- (3) 森和「從離日与反支日看《日書》的繼承關係」（出土数術文献国際學術研討会、於中国・湖北省武漢大学、2008 年 4 月 9 日）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森 和 (MORI MASASHI)

早稲田大学・高等研究所・研究員

研究者番号：10367146